

## 西北インドとジャータカ(一)

——ガンダーラを中心として——

早田啓子

「ガンダーラ」というのは、インド亜大陸の西北地方、現在のパキスタン北部の古称である。

地理上の位置から言えば、北緯27度から40度の間に東西に横切っている高い山々に注目しなければならない。それらは東からヒマラヤ山脈やカラコルム山脈が西へ走った西端にナンガ・パルバット山(八二六m)、その南側にはビール・パンジャル山脈、更に西へ行くとコーヒスタン山脈やヌーリスタン山脈、ヒンドウクシュ山脈といった世界に冠たる八〇〇〇m級の山々である。

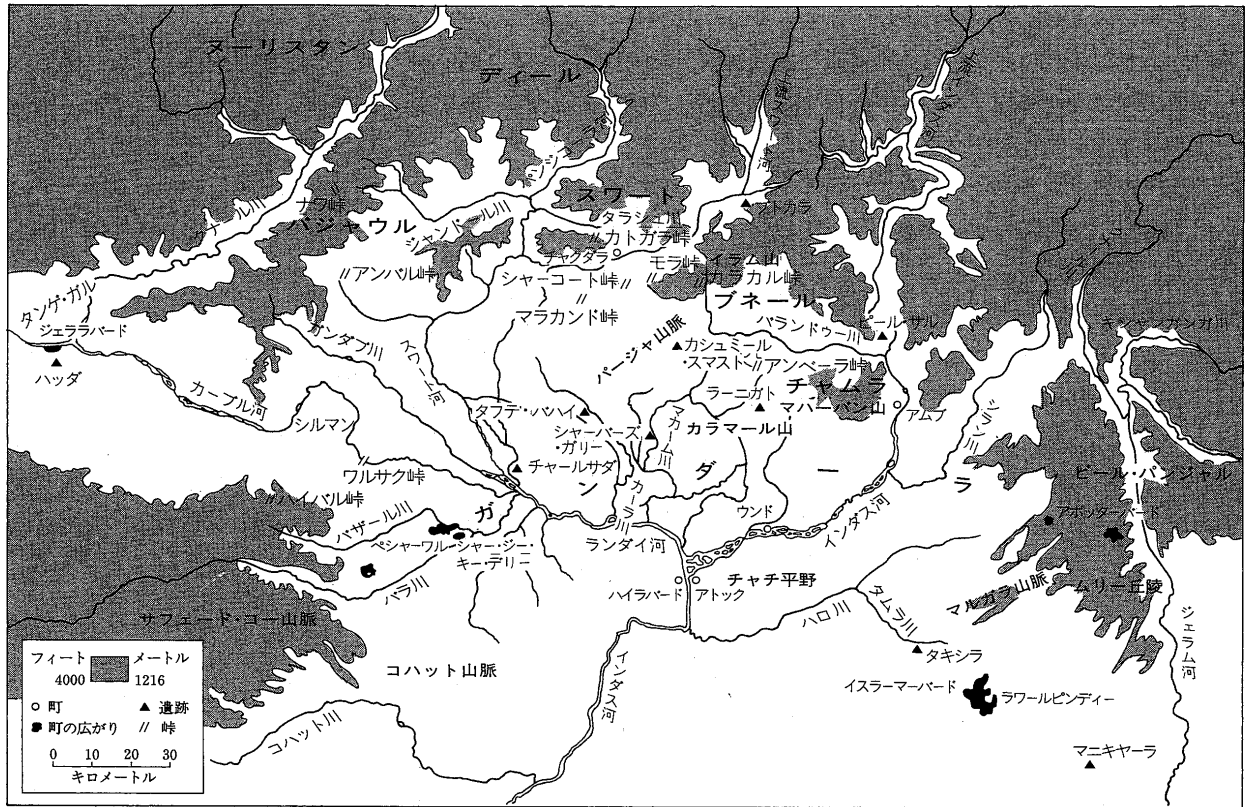
ガンダーラを囲む山脈について、更に詳しくみてみよう。ガンダーラはヒマラヤ山脈の東南端の麓から南部一帯に広がる平野である。ここに何本かの岩の支脈が迫り出している。<sup>①</sup>カシュミール・スマストから南西に走るパージャ山脈、シャーパーズ・ガリを西端とするカラマール山脈、ラーニガト山稜更にはインダス河本流とコハット川に挟まれたコハット山脈などである。

峻険な山々に囲まれたガンダーラ平野には、幾筋もの河川が流れ込んできている。チベットのカイラス山に源を発したインダス河は、ラダックのレーへ抜けて来る。更にギルギットからスカルドへと流れ下る。筆者はラ

ダックからギルギット、スカルド等を踏査した。この地域を流れるインダス河上流は高度差が大きいので、谷はV字に削られ激しい地鳴りを轟かせ荒れ狂う奔流となって深い峡谷を造り出している。

ガンダーラの気候はティッソ<sup>①</sup> Tissoeに拠ると近くの山々の大陸性氣候のお陰で、夏の激しいモンスーンの影響は少ないという。むしろパンジャブ地方に豊かな雨を降らせ、スレイマン山脈に突き当たって、直角に向きを変えて風は弱まるという。逆に冬は、北から吹き降ろす風が強烈である。ティッソは、「冬は住民にとってことに苦しい。とりわけ平野においては、寒さから身を守るのは難しい。」<sup>②</sup>と記している。

土地や産物についてはどうであろうか。五世紀にガンダーラを訪れた法顯は『法顯傳』では、それについて余りふれていない。「捨眼説話」について記し小乗仏教が栄えていたことなどを述べるにとどめている。また、ガンダーラの東部にあるタキシラについての記載も「截頭説話」や「捨身飼虎説話」などについて記しているのみである。更に、南のプルシャプラについても「雀離浮圖」の説話を載せているだけで、広義のガンダーラ地方の土地柄そのものについては記載が無い。仏教に関する関心事が中心になっている為と考えられる。



図① ガンダーラの山系・河川・峠

六世紀に書かれた『宋雲行紀』は、先ずこの国の政治について次のように記している。

正光元年四月中旬入乾陀羅國。土地亦與烏場國相似。本名業波羅國。爲歌噠所滅。遂立勅勤爲王。治國以來已經二世。立性凶暴。多行殺戮。不信佛法。好祀鬼神。國中人民悉是婆羅門種。崇奉佛教。好讀經典。忽得此王深非情願。自恃勇力與國賓爭境。連兵戰鬪已歷三年。王有鬪象七百頭。一負十人。手持刀槍象鼻縛刀。與敵相擊。王常停境上終日不歸。師老民勞百姓嗟怨。<sup>注③</sup>

ここでは、ガンダーラの土地についてウジャーナ国と似ていると記している。ウジャーナ国の記述を見よう。

十二月初入。烏場國。北接葱嶺。南連天竺。土氣和暖。地方數千。民物殷阜。匹臨淄之神州。原田無廬。等咸陽之上土韓羅施兒之所。薩埵投身之地。舊俗雖遠遠土風猶存。<sup>注④</sup>

この土地の気候は温和で、野原や田畑の美しさは咸陽の一等地に等しいとまで評している。ウジャーナはサンスクリットでは Uddiyana 又は Udyana と表記され、漢訳では烏場、烏菴または烏仗那と音訳される。スワート川下流域にあった国で、王城は現在のミルゴラ Mirgora に比定されている。その土地については次のように記されている。

土地肥美人物豊饒。百穀盡登五果繁熟。夜聞鐘聲。遍滿世界。土饒異花冬夏相接道俗採之。上佛供養。<sup>注⑤</sup>

即ち、土地は肥沃で五穀豊穡であり果物や花々も豊かに実っていた。『宋雲行紀』にはプルシャ Pulusha、Palusa の項に、流域の平野は豊饒の

地であり、家々も豊かで数多く、林は茂り泉の水は豊富であることを記している。しかしカーブル河を挟んだ対岸に在るプルシャプラの土地柄については記していない。

一方、『大唐西域記』の中では次のように述べられている。

健駄邏國。東西千餘里。南北八百餘里。東臨信度河。國大都城號布路沙布邏。周四十餘里。王族絕嗣。役屬迦畢試國。邑里空荒居人稀少。宮城一隅有千餘戸。穀稼殷盛花果繁茂。多甘蔗出石蜜。氣序溫暑略無霜雪。人性恒怯好習典藝。多敬異道少信正法。自古已來印度之境。作論諸師則有那羅延天。無著菩薩。世親菩薩。法救。如意。脇尊者等。本生處也。僧伽藍千餘所。摧殘荒廢蕪漫蕭條。諸窣堵波頗多頽圯。天祠百數異道雜居。<sup>注⑥</sup>

因みに隣国のウジャーナ国についての玄奘の記述をみると次のように記されている。

烏仗那國。周五千餘里。山谷相屬川澤連原。穀稼雖播地利不滋。多蒲萄。少甘蔗。土產金鐵宜鬱金香。林樹鬱鬱花果茂盛。寒暑和暢風雨順序。<sup>注⑦</sup>

『宋雲行紀』のこの地が土地は肥沃で穀物や果物が豊富であるという記述とは違って『大唐西域記』では、地味は豊かでなく穀物は豊かでないと記している。

法顯がガンダーラを訪れた五世紀、宋雲が訪れた六世紀そして玄奘の七世紀、それぞれ百年ほどの隔たりがある。しかし歴史的にはガンダーラという土地柄は、何千年にも亘って幾筋もの大小河川が絶え間なく上流から肥沃な土壌を運んできたものと考えられる。

図②を見ると明らかであるが、ヒマラヤ山脈に源を発したインダス河は、

ナンガ・パルバット山の北麓を通っている。丁度この北麓の地点がチラス峡谷である。筆者は一九八八年にこの地を踏査した。写真①は、チトラル峡谷とインダス河上流を上空から写したものである。山脈は深く削り落とされて谷々を造り、インダス河に土砂を流し込み扇状地を形成していることが分かる。山脈が幾重にも褶曲したこの地方は、まさに自然が圧倒的な迫力をもって厳然として存在している。

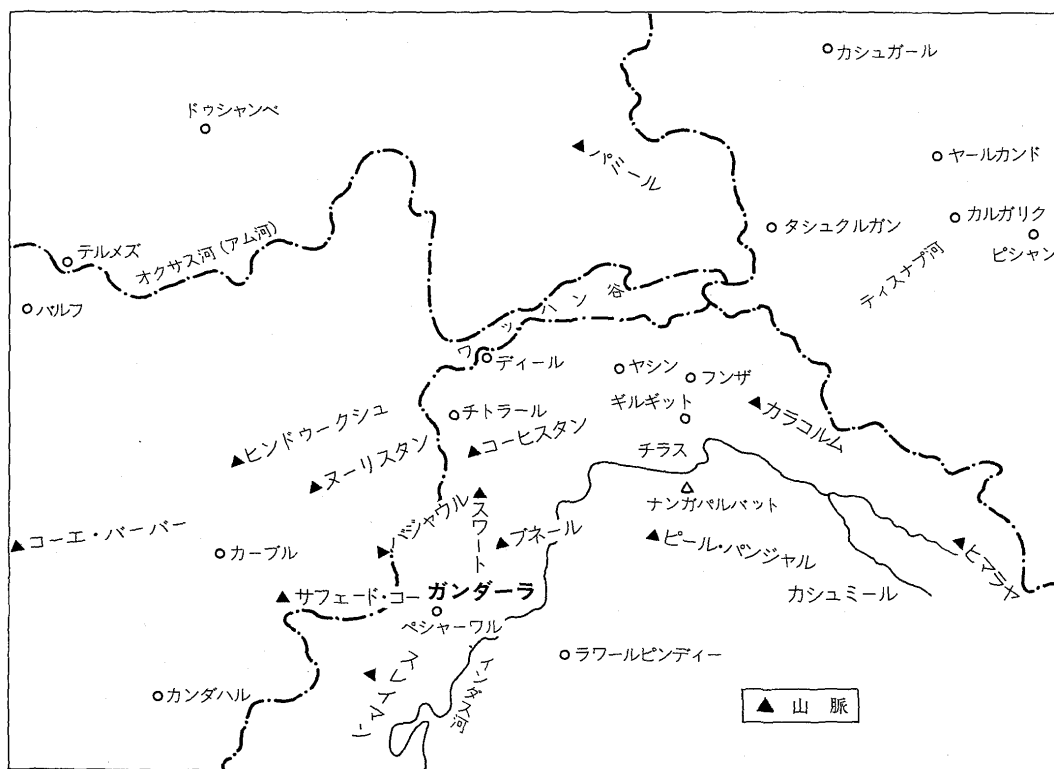
チラスの谷間には、様々な民族が住み、そこでは固有の生活や伝統が存続し営まれている。フンザ、ヤシーン、ダルディスタン、チトラルそしてディールなどの谷々である。彼らは峡谷にへばり付くようにして暮らし、僅かばかりの土地を耕作し、家畜を飼い果樹を植えて生活している。

もともとこの地方一帯は、インドプレートがユーラシアプレートの下に潜り込むことで隆起した山脈である。白亜紀、第三紀及び第四紀には褶曲と断層の衝上現象が交互に繰り返されていく。従って、この時期以前に海底に堆積した石は、褶曲と衝上運動の中で圧力を加えられ変成岩へ変化していった。

フランスのガンダーラ美術研究者ティッソは次のように述べている。

ヒマラヤの造山運動の諸現象を図解することには、興味深いものがある。それは山脈の方向、土壌の性質、およびガンダーラで職人たちが手に行うことのできた素材がなんであつたかを説明することも可能にするからである。……ガンダーラの芸術家たちが用いた素材は、中新世紀に断層化し、ついで変成化した古い岩質のもので、もっと特定して言えば雲母片岩、千枚岩、珪岩（石英岩）などである。<sup>注⑧</sup>

ガンダーラで目にする殆どの出土品は、ティッソが述べているように変



図② ガンダーラの山脈



写真① チトラル峡谷とインダス河

成岩や片岩と言われる暗緑色の石製の作品が多い。従って、この一帯が何億年にも亘って造山運動を続け、地殻は熱や圧力によって大きく変質してきたことを裏付けている。

インドプレートが北進していったという事実は、山脈が東西に走っていることを意味している。従って、谷々から流れ出した河川も東西に流れているのである。

ガンダーラは、インダス河がアフガニスタンから流れて来るカーブル河、スワート河など多くの河川を抱き込んで広がる平野である。人々はここで灌漑農業を行っていた。インダス河はアトックを抜けて南のパンジャーブへと流れ下っている。カーブル河とスワート河が合流する辺りはチャールサダと呼ばれ、かつて一九八六年、ガンダーラを踏査したアルフレッド・フーシェ Alfred Foucher はチャールサダについて『インド・アフガン境上にて』で次のように述べている。

水の澄んだ一筋の河が流れる。ブロンズ色の砂州が水をさえぎる。白い漆喰の壁、なつめ椰子が石灰に混じっている。棕櫚の深い茂みの中で落ち着かぬ白をまとった姿。オリエント風で、ちょっぴり聖書の風景を想わせる魅惑的な一幅の絵だ。私たちの目の前にあらわれたチャールサダの風情だ。……

チャールサダの邑落は、この地方の古くからの都城のうちでも、ペシヤワールを除けば、いまだに活気を失わず、バザールが生き生きとした活況を呈する唯一のものであった。この町はやはり、プシユカラヴァティーというインド人の都邑、アレクサンドロス・ペウケラオティスの町の後継者なのだ。<sup>注⑨</sup>

百年ほど前になるが、フーシェは当時のチャールサダの風情をこのような美しい表現で讃えている。

ここに出てくるプシユカラヴァティー Puskaravati という地名は、広義ではガンダーラ (Gandhara 健陀羅・乾陀羅 現在のチャールサダ) の首都の旧名であった。その首都は前二世紀以降にはプルシャプラ (Purusapura 現在のペシヤワール Peshawar) に移った。

次に、西北インドに頻見するジャータカ (Jataka) の問題について考えてみようと思う。ジャータカの問題は、西北インドの多くの土地に残されている伝説も含めて大乘仏教興隆の問題と絡めて重要な問題を提起している。

まずジャータカというのは、本生経とも言われパーリ語で書かれた南方上座部の経蔵のテキストをさす。<sup>注⑩</sup>

五世紀にこの地を訪れた法顯は『法顯傳』の中で次のように述べている。<sup>注⑪</sup>

從此東下五日行到健陀衛國。是阿育王子法益所治處。佛爲菩薩時。亦於此國以眼施人。其處亦起大塔金銀校飾。此國人多小乘學。<sup>注⑫</sup>

また七世紀にこの地を訪れた玄奘は『大唐西域記』の中で次のように記している。

迦膩色迦王伽藍東北行五十餘里。渡大河。至布色羯邏伐底城。周十四五里。

居人殷盛閭閻洞連。城西門外有一天祠。天像威嚴靈異相繼城東有窣堵波。無

憂王之所建也。即過去四佛說法之處。先古聖賢自中印度。降神導物。斯地寔

多。即伐蘇蜜咀羅<sup>唐言世友。舊曰和須蜜多訛也</sup>論師於此製衆事分阿毘達磨論城北四里有故伽

藍。庭宇荒涼僧徒寡少。然皆遵習小乘法教。即達磨咀邏多<sup>唐言法救。舊曰達磨多羅訛也</sup>論師。

於此製雜阿毘達磨論。<sup>注⑬</sup>

法顯が記したダルマヴァルダナ (法益) の伝説、つまりクナール王子の

盲目の話は拙稿<sup>注⑭</sup>で取り上げた。ここでは『法顯傳』に出てくるジャータカについて記す。法顯は、先に引用したように「仏が菩薩だった時にも、またこの国において「自らの」眼を人に施した。そこにも大塔をたて、金銀で校飾<sup>注⑮</sup>である。」としている。

一方、玄奘も前述したプシュカーラヴァティーの条に続いて『大唐西域記』の中で次のように記している。

伽藍側有牽堵波。高數百尺。無憂王之所建也。雕木文石頗異人工。是釋迦佛昔爲國王。修菩薩行。從衆生欲。惠施不倦。喪身若遺。於此國土千生爲王。卽斯勝地。千生捨眼捨眼東不遠有二三牽堵波。各高百餘尺。右則梵王所立。左乃天帝所建。以妙珍寶而瑩飾之。如來寂滅寶變爲石。基雖傾陷尙日崇高<sup>注⑯</sup>。

ここでは無憂王（アショカ王）が建てたストウーパにまつわる伝説を取り上げている。「木の彫り、石の文は人工のものとはすこぶる異なっている。これは釈迦仏が昔時国王となり菩薩行を修行した折りに、衆生に請われるがままに施しをして倦むことなく、まるで自分の身体をなくしてもなお残っているかの如く「施しに務められ」、この国に千度生まれて王となられたところである。この聖地が千生捨眼の所である。」というものである。

プシュカーラヴァティーに残る「千生捨眼」などのような捨身の行は菩薩行といわれやがて大乘仏教へと繋がっていく思想を孕んでいる。このような仏教説話は多くの經典に見いだすことが出来る。今、それらのいくつかを經典の中に探ってみる。

尸毘国の王子として生まれた摩訶薩は、国王となって正法を以って国を統治

していた。国の六ヶ所に布施所を設けて布施を行っていた。或る日のこと、「もう、外的なものでなく内的なものを布施したい」と思うようになった。そこに盲目の婆羅門が通りかかり、王の眼を乞うた。王は家来に「愚図愚図致すな!」<sup>注⑰</sup>と言ひ、その眼を婆羅門に与えた。その後、帝釋天の力によって尸毘王の眼は回復する。

婆羅門言。外物布施。福德不妙。内身布施。果報乃大。我久失眠。長夜處冥。承聞大王。故發意來。欲乞王眼。王聞歡喜。語婆羅門。若欲得眼。我當相與。婆羅門言。欲與我者。何時能與。王語之曰。却後七日。便當與汝。<sup>注⑱</sup>

こういった捨身のジャータカは多くの絵画の中でも取り上げられている。例えば、中国新疆ウイグル自治区にあるキジル千仏洞（写真②③）の壁画やインドのアジャンターの洞窟壁画などにも多く描かれている。

フーシェは次のように述べている。

およそ西暦の初めころ、寺々は覺をつらね栄光につつまれていた。それらの遺址がいまも残っている。すべての残址のなかでもっとも重要な遺跡は、北へさらに二キロほどいったところにある。それは、仏陀がまだ前世にあったるとき、まことに不合理なことだが、自分の両眼を布施するという崇高なおこないをしたと信じられている、まさにその場所であった。信者たちから深い感銘をうけた敬虔なる人（無憂王）がここに巨大な記念の仏塔を建てた。塔は、土とスワート川に隣接する河床から拾い集められた大きな丸い小石とを交互に重ね合わせた層よりなる人工の小丘というおもむきを呈している。一二〇〇年ほど前、求法僧玄奘がここを訪れたとき、崩れかかったこの記念碑の残址はそれでもなお高さ「數百尺」〔慈恩伝〕には高さ「二〇〇尺」

とある」あったという。<sup>注⑩</sup>

フーシェもここで捨眼のジャータカとアショーク王のストウーパについて語っている。捨眼のジャータカは、五世紀の『法顯傳』ではスハタ国（宿呵多国 Swat）の説話とし、六世紀の『宋雲行紀』では、プルシヤ国の伝説としている。さらに、七世紀の『大唐西域記』ではプシュカーラヴァティー（布色羯邏伐底 現在のチャールサタ）の説話として伝えている。

經典からの出典について述べると、『Jātaka』499や『賢愚經』卷六の他にも『Jātamaṇā』2、『弥勒所問本願經』、『菩薩本行經』卷下、『方广大莊嚴經』卷五、『悲華經』卷九、『大悲分陀利經』卷四等に出ている。

『法顯傳』では、スハタ国のジャータカとして「捨眼説話」の他に次のような「代鵠本生譚」を記している。

法顯等住此國夏坐。坐訖南下到宿呵多國。其國佛法亦盛。昔天帝釋試菩薩化作鷹割肉貿鵠處。佛既成道與諸弟子遊行。語云。此本是吾割肉貿鵠處。國人由是得知。於此處起塔金銀校飾。<sup>注⑪</sup>

これは、「尸毘王本生譚」と呼ばれるジャータカで同様の話を『宋雲行紀』では次のように伝えている。

於是西北行七日。渡一大水至如來爲尸毘王救鵠之處。亦起塔寺。昔尸毘王倉庫爲火所燒。其中粳米焦然至今猶在。若服一粒永無瘡患。彼國人民須禁日取之。<sup>注⑫</sup>

同じく『大唐西域記』では、ウジャーナ国（烏仗那国）の摩愉伽藍の西に伝わる「代鵠本生譚」として次のように伝えている。

摩愉伽藍西六十里至宰堵波。無憂王之所建也。是如來昔修菩薩行號毘迦王。<sup>注⑬</sup>  
唐言與舊曰爲求佛果於此割身從鷹代鵠  
尸毘王託

「尸毘王本生譚」には大別して、「施眼本生」、驚への「施眼本生」そして「代鵠本生」の三話が伝えられている。ここでの説話は「代鵠本生譚」である。それは次のような話である。

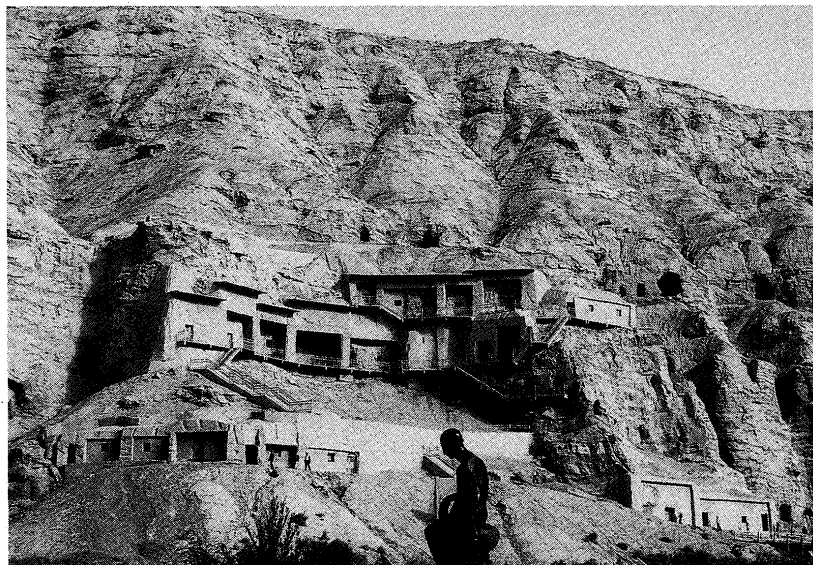
その昔、摩訶薩は尸毘国の王として正法を以て国を統治していた。王は、王国の六ヶ所に布施所を設けていた。尸毘王は外的な布施に満足せず、内的な布施を行いたいと願った。つまり己の心臓や身体肉、さらには血液でさえ布施したいと願っていたのである。ある時、一羽の鵠が鷹に追われて逃げまどい、王の腋の下に隠れた。鷹は王に同量の肉を要求した。王は自らの股の肉を次々に切り取ったがまだ足らず、とうとう全身を秤に載せて鵠の命を救った、という物語である。

このようなジャータカは、次のような出典に拠るものである。即ち、『Jātaka』499、『Jātamaṇā』2『菩薩本生鬘論』一、『菩薩本行經』下、『大宝積經』八〇、『師子素駄婆王断肉經』、『護国尊者所問大乘經』三などである。

次に「月光王説話」を上げてみよう。『法顯傳』では、タキシラ国（Taxila 竺刹利尸羅国咀叉始羅国 Takṣasiḥa Skt. Takṣasiḥa Pa.）の話として次のように記している。

自此東行七日。有國名竺刹利尸羅。竺刹利尸羅漢言截頭也。佛爲菩薩時。於此處以頭施人。故因以爲名。<sup>注⑭</sup>





写真② キジル千仏洞 手前は鳩摩羅什の像



写真③ キジル千仏洞に描かれたジャータカ  
(線描化したもの) Grunwedel による



『宋雲行紀』でも同様にタキシラ国の「捨頭施人説話」として次のように記している。

於是西行五日至如來捨頭施人處。亦有塔寺。二十餘僧。<sup>注②</sup>

『大唐西域記』では、タクシャシラーのバラ・ストウーパ (Badrakar Stupa) がその跡だとして次のように記している。

城北十二三里有窣堵波。無憂王之建也。或至齋日時放光明。神花天樂頗有見聞。聞諸先志曰。近有婦人身嬰惡癩。竊至窣堵波貢躬禮懺。見其庭宇有諸糞穢。掬除灑掃塗香散華採青蓮重布其地。惡疾除愈形貌增妍。身出名香青蓮同馥。斯勝地也。是如來在昔修菩薩行。爲大國王。號戰達羅鉢刺婆<sup>唐言月光志求菩提</sup>斷頭惠施。若此之捨凡歷千生<sup>注③</sup>

この「月光王本生譚」は次のような説話である。

その昔、跋陀耆婆城に、正法をもって国を統治している月光王がいた。その名声は広く天下に轟いていた。辺地の一小国の王、毘摩斯那は月光王に嫉妬しバラモンを遣って王の頭を乞わせた。月光王は過去以来九百九十九頭を布施し、今この頭を布施すれば千頭を布施することになり、満行すると言って自らの頭を截った。その時の月光王は釈尊であったという話である。

この月光王の截頭の話の出典は以下の經典類に拠っている。即ち、『六度集經』卷一、『賢愚經』卷六、『菩薩本緣經』卷中、『仏説月光菩薩』『大方便仏報恩經』卷五、『大宝積經』八〇、『Divyavadana』などである。次に上げる「捨身飼虎説話」は有名な布施説話で、日本にも伝えられ法

隆寺の「玉虫厨子」にも描かれている。

『法顯傳』では次のように伝えている。

復東行二日至投身餓虎處。此二處亦起大塔。皆衆寶校飾。諸國王臣民競與供養。散華然燈相繼不絕。通上二塔彼方人亦名爲四大塔也。<sup>注④</sup>

『宋雲行紀』では『法顯傳』と違いウジャーナ国(烏場国、烏菴国、烏伐那国)の話として次のように伝えている。

去王城東南山行八日。如來苦行投身餓虎之處。高山籠從危岫入雲。嘉木靈芝叢生其上。林泉婉麗花綵曜目。宋雲與惠生割捨行資。於山頂造浮圖一所。刻石隸書銘魏功德。山有收骨寺。三百餘僧。<sup>注⑤</sup>

さらに、『大唐西域記』では、タクシャシラー(咀叉始羅国、現ハザラ Hazara)の話として次のように記している。

從此復還咀叉始羅國北界渡信度河。南東行二百餘里度大石門。昔摩訶薩埵王子。於此投身餓虎擇<sup>音徒</sup>其南百四五十步有石窣堵波。摩訶薩埵餓獸之無力也。行至此地乾竹自刺以血啗之。於是乎獸乃噉焉。其中地土洎諸草木。微帶絳色猶血染也。人履其地若負芒刺。無云疑信莫不悲愴。捨身北有石窣堵波。高二百餘尺。無憂王之所建也。雕刻奇製時燭神光。小窣堵波及諸石龕。動以百數周此瑩域。其有疾病旋繞多愈。<sup>注⑥</sup>

「捨身飼虎説話」は次のような話である。

その昔、ある国の王に三人の息子がいた。その第三番目の王子を摩訶薩埵とつけた。或る日、国王夫妻と三人の王子や家来達が山林で遊んでいた。三人の王子達は、一匹の虎が子を生んだものの飢えのために子を食べよう

としている場面に出くわす。二人の兄達はそのままその場面を離れたが、摩訶薩埵王子は即座にこの飢えた親虎に我が身を与えることを決意した。布施行を満願成就するためであった。そこで、高い石崖の上から虎の前に身を投じた。しかし、虎は飢えのために動くことすら出来なかったのである。そこで竹を使って我が身を刺し、まず血を飲ませてから元気を回復させしかる後に我が肉を食べさせた。

国王夫妻や兄達は残った遺骨を見て哭する。摩訶薩埵王子は、捨身の功德に抛って天に生まれ、父母をはじめ兄達に諸行が無常であるという教えを説いたという。

このような「捨身飼虎」のジャータカの出典は以下のような經典に拠っている。即ち、『六度集經』卷一、『菩薩投身餓虎起塔因緣經』卷下、『賢愚經』卷一、『菩薩本行經』卷下、『菩薩本生鬘論』一、“Jātakamālā”<sup>1</sup> などである。

『法顯傳』は、法顯が六十歳で天竺への旅を決意しそれを記した記録である。その内容も極めて簡潔な表現になっている。従って、そこで扱われているジャータカの数も限られている。その点、やはり『大唐西域記』で取り上げているジャータカの数15話以上上る。

次に『宋雲行紀』と『大唐西域記』が取り上げているジャータカについて見ていこう。

まず、「ヴィシュヴァンタラ本生話」(鞞羅施兒説話)であるが、『宋雲行紀』ではウジャーナ国の話として記している。一方、『大唐西域記』では、ガンダーラ国のダンダローカ山(彈多落迦山、現メハサンダ Mekha-Sanda Mahisi-sanda Skt.)に伝わる話として記している。まず『宋雲行紀』は次のように記している。

十二月初入烏場國。北接葱嶺。南連天竺。土氣和暖。地方數千。民物殷阜。匹臨淄之神州。原田無廬。等咸陽之上土。鞞羅施兒之所。薩埵投身之地。舊俗雖遠土風猶存。<sup>注②</sup>

次に『大唐西域記』では次のように記している。

跋婁沙城東門外有一伽藍。僧徒五十餘人。並大乘學也。有牽堵波。無憂王之所建立。昔蘇達拏太子擯在彈多落迦山<sup>舊曰壇特山説也</sup>婆羅門乞其男女於此鬻賣<sup>注③</sup>

この話の内容には、「大象説話」が前半に語られている。尸毘国の太子、須大拏は布施を好む人であった。バラモンに乞われるままに、二人の児を檀特山で施してしまった。バラモンは二人の児を売ろうとしたが、それが機縁となって太子夫妻は二児と共に王に迎えられて国へ帰った。太子の布施行が満願成就したという話である。

『ヴィシュヴァンタラ本生話』の出典は、『太子須大拏經』、『六度集經』などの經典に拠るものである。

この『ヴィシュヴァンタラ本生話』の前半は『白象宮説話』が語られている。『宋雲行紀』の中では、それは次のようにプルシャでの説話ということになっている。

城北一里有白象宮。寺内佛事皆是石像。裝嚴極麗。頭數甚多。通身金箔眩耀人目。寺前繫白象樹。此寺之興實由茲焉。花葉似棗季冬始熟。父老傳云。此樹滅佛法亦滅。寺内圖太子夫妻以男女乞婆羅門像。胡人見之莫不悲泣。<sup>注④</sup>

一方、『大唐西域記』では次のようにヴァローチャ(跋婁沙城 現シャーバースガリ Shābhāz Garhi)での説話ということになっている。

商莫迦菩薩被害東南行二百餘里至跋摩沙城。城北有鞞堵波。是蘇達拏太子唐言善牙以父王大象施婆羅門。蒙譴被擯顧謝國人。既出廓門於此告別。其側伽藍五十餘。僧並小乘學也。昔伊濕伐邏唐言自在論師於此製阿毘達磨明燈論注⑧

この「白象宮説話」や「大象説話」と呼ばれるジャータカの内容は次のようなものである。須大拏太子は、布施行を好む人物であった。或る日、敵に父王が大切にしていた白い象を乞われるままに与えてしまった。父王は激怒して太子の妃と二人の児と共に国外に追放した。太子の布施行はこれでもまだ終わらず、ついにバラモンに乞われるままに妃や二人の児も布施してしまった。やがて布施が満願、妃や二児と共に王に迎えられたという説話である。

このジャータカの典拠となる經典は次のようなものである。「Visvantara-Katala Skt. Vessantara-Jātaka Pa.」『六度集經』卷二、『太子須大拏經』、『菩薩本緣經』上、『有部毘奈耶藥事』一四などである。

※この論考の続きと大乘仏教との関係については後の考察とする。

### 〈注〉

- ① 『図説ガンダーラ』 フランシーヌ・ティッシン Francine Tissot 前田耕作監修 東京美術 一九九三年 六頁〜七頁
- ② 注①に同じ 七頁
- ③ 『宋雲行紀』 大正新脩大藏經 第51巻 大藏出版 昭和三年 一〇二〇頁c
- ④ 『宋雲行紀』 大正新脩大藏經 第51巻 大藏出版 昭和三年 一〇一九頁c
- ⑤ 『宋雲行紀』 大正新脩大藏經 第51巻 大藏出版 昭和三年 一〇二〇頁a
- ⑥ 『大唐西域記』 大正新脩大藏經 第51巻 大藏出版 昭和三年 八七九頁b、c

- ⑦ 『大唐西域記』 大正新脩大藏經 第51巻 大藏出版 昭和三年 八八二頁b

⑧ 注①に同じ 三頁

- ⑨ 『ガンダーラ考古遊記』 一四〇頁〜一四二頁 アルフレッド・フーシェ著 前田龍彦・前田寿彦訳 同朋舎 一九八八年 本書はフーシェの著書『インド・アフガン境上にて』(“Sur La Frontière Indo-Afghane” Le Tour du Monde 一八九九年)と『ガンダーラの古地理』(“Note sur la géographie ancienne du Gandhāra” B.E.F.O., I, 一九〇一)を柱として編まれている。

- ⑩ 『ジャータカ』 Jātaka パーリ語で書かれた南方上座部の経蔵に含まれるテキスト。22編547ジャータカから成る。特別な形式と内容を備えた古い仏教文学のジャンルの物語。生経・本生経・本生物語とも言われるようにブッダこの世に生まれる以前の物語で、悟りを得る前の修行者の姿はボティサットバ(菩薩)とかマハーサットバ(大士)と呼ばれる。従って、ジャータカは過去世においていかなる善行をし功徳を積んだために現在世でブッダとなることができたかの因縁を物語る。

ジャータカは現在世物語・過去世物語・結合句の三部より構成されている。民族の口碑耶伝説の中にある面白い物語をことごとくジャータカと化することができ。インドの説話・寓話・お伽噺の類が豊富に収録されており、世界の説話文学の宝庫となった。仏教の修行僧たちは一般の民衆を教化するために、この面白くて教訓的なジャータカを利用したと考えられる。

- ⑪ 法顯 東晉時代の僧。隆安三(三九九)年、慧景・道整等十余人と共に長安を出発し葱嶺を超え、艱難辛苦して中印度に達し仏跡を参拝して経律論を求めた。海路を経て儀熙十(四一四)年青州に帰着した。長安を発して十五年、三十余国を回った。多くの經典を翻訳し荊州の辛寺で82歳で没。印度旅行記(『法顯傳』)がある。

- ⑫ 『法顯傳』 大正新脩大藏經 第51巻 大藏出版 昭和三年 八五八頁b
- ⑬ 『大唐西域記』 大正新脩大藏經 第51巻 大藏出版 昭和三年 八八一頁a
- ⑭ 拙稿「タキシラの仏教美術について」 早田啓子 昭和女子大学学苑 平成十

八年 十月 第七百九十二号 四六頁

⑮ 『大唐西域記』 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 八八一頁 a

⑯ 『尸毘王本生物語』 『南傳大藏經』 第35卷 (小部經典13) 499 大正新脩大藏經刊行會 一九七四年

⑰ 『賢愚經』 32 「快目王本生」 大正新脩大藏經 第4卷 大藏出版 昭和三年 三九一頁 c 三九二頁 a

⑱ 注⑨に同じ 一四一頁～一四三頁

⑲ 『法顯傳』 「代鵠本生譚」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 八五八頁 a 〓 b

⑳ 『宋雲行紀』 「尸毘王本生譚」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 一〇二一頁 c

㉑ 『大唐西域記』 「代鵠本生譚」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 八八三頁 c

㉒ 『法顯傳』 「月光王伝説」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 八五八頁 b

㉓ 『宋雲行紀』 「捨頭施人伝説」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 一〇二二頁 a

㉔ 『大唐西域記』 「月光王本生譚」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 八八四頁 c

㉕ 『法顯傳』 「捨身飼虎説話」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 八五八頁 b

㉖ 『宋雲行紀』 「捨身飼虎説話」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 一〇二〇頁 b

㉗ 『大唐西域記』 「捨身飼虎説話」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 八八四頁 c

㉘ 『宋雲行紀』 「ヴィシシュヴァンタラ本生話」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 一〇一九頁 c 一〇二〇頁 a

㉙ 『大唐西域記』 「ヴィシシュヴァンタラ本生話」 大正新脩大藏經 第51卷 大

藏出版 昭和三年 八八一頁 b

⑳ 『宋雲行紀』 「白象宮説話」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 一〇二二頁 a

㉑ 『大唐西域記』 「大象説話」 大正新脩大藏經 第51卷 大藏出版 昭和三年 八八一頁 b

#### 〈図〉

① 『図説ガンダーラ』 フランシヌ・ティッソ 前田耕作監修 東京美術 一九九三年 四頁

② 図①に同じ 二頁

#### 〈写真〉

① (筆者撮影)

② (筆者撮影)

③ キジル千仏洞に描かれたジャータカ 「克孜尔石窟」 新疆对外文化交流協会 新疆美術摄影出版社 二〇〇五年四月

(そうだ けいこ 文化創造学科)